

「苑」この人に会いたい
女優
松島トモ子さん(62歳)



松島トモ子

「満州からの引き揚げ、アメリカ留学、
事故に遇ったアフリカ、シベリア訪問……。
私の転機はすべて外国から始まっているのかもしれない」

80本を超える主演映画で一世を風靡し、名子役といわれた少女時代から現在に至るまで幅広い活躍を続けている松島トモ子さん。戦死した父の眠る場所を探すシベリア訪問など、人生のターニングポイントとなった出来事を伺いながら、松島トモ子さんの生き様に迫った。



45歳で実現した 父が眠るシベリア訪問

終戦の年の昭和20年、松島さんは旧満州奉天の病院で生まれた。父は三井物産に勤務していたが、松島さんが生まれる2

ヶ月前に現地召集を受け、シベリアで捕虜となっていた。生後10ヶ月の時、母とともに引き揚げ船に乗って日本へ。父が戦死したという知らせを受けたのは、終戦から数年後のことだった。

「昭和24年に父の戦友の住谷さんという

方が訪ねていらして、『あなたのお父さんを埋めてきました』と父が眠っている場所を書いた地図と父の最後の日誌を渡されたんです。それまでは母も私も父が元気で帰ってくると固く信じて待っておりまして。すぐにでも飛んで行きたくて、大使館や厚生省、通信社など地図を持ってお訪ねしたんですが、『そういう場所は地図がない』とか『そこに日本兵は来なかった』とか、日本からの墓参が何度もロシアに行くようになってこそだけはなぜか禁じられた場所、どうしても行くことが叶わなかったんです」。

シベリア訪問が実現したのは1990年（当時45歳）のこと。

「シベリアのフィドルフカに着いて、明日にでも父の眠っている場所を探せると思つて母と準備をしていると、2日目に今いる場所から一步も動いてはいけないって立ち入り禁止令が出たんです。そのまま4日待たされて、あの目の前にある丘がそうかもしれないし45年間待たされたんだから何とか母を連れていきたいっていう地団太踏む思いでいましたら、帰る日の5日目になつてたつたの3時間ですけど許可が出ました。現地の方たちも証言に来て記憶を手繰りながら一生懸命探してくれたんですけど、なぜか女性ばかりなんです。聞けばその年代の男性はみんな戦争で亡くなって、残ってるのは女性だけということでは



1990年5月8日にやっと実現したシベリア墓参。クスリー地区フィヨドルフカにて

した。国も宗教も言葉も何もかも違うけれど、残された女の悲劇というのは世界中どこでも同じなんだなって実感しましたね。その中の一人は、ご主人を戦争で亡くしてからトラックの運転手をしながら3人の子供を育てあげた方で、みんなそういう境遇の方たちなのに私と母のために一生懸命探してくれるのは嬉しい反面、申し訳なさもありました」。

手書きの地図をたよりに探したのは、南側の斜面で柏の木が生い茂ってコスモスの花が咲いている丘。

「テレビのカメラができておりましたので、カメラマンの方がここではないかっていう風景を切り取って下さって。その丘に登ってみましたら、母が「ここがいい。ここにしましょう」と申しましたので、母が納得したならそれでいいなと思いました。日本が一番よく見えるところに卒塔婆を立てて花をいっぱい飾って。80名の日本兵が南側の斜面で亡くなっていると伺っていたので、日本から80本の真っ赤なろうそくを持って行って立てて、手作りですけど、やつとお墓ができ上がったという感じでした」

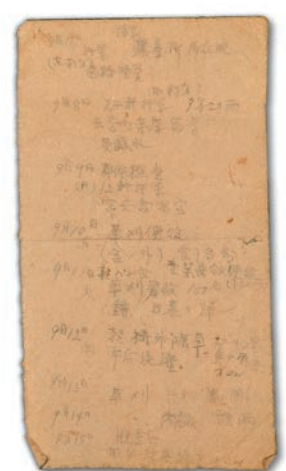
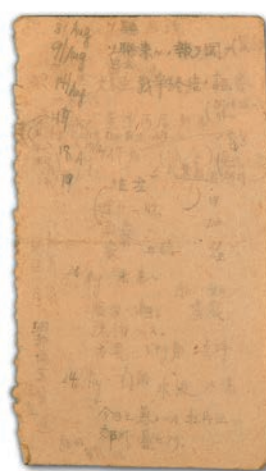
初めて痛感した父母の思い

母のお腹にいる時に父と別れた松島さんは、それまでは父と言ってもあまりびん

とこなかったという。

「父が眠っているであろう場所に立ってみて、どんなに日本に帰りたいかたっただろうっていう父の思いを知ったような気がしますね。お墓を作ることに一生懸命で母がどこにいるのか見ていなかったんですけど、次に母を見た時には黒い喪服姿だったんです。同じ部屋にいたのにブルゾンの下は喪服だったって知らなかったんですね。

母が静かにぬかずいて長い長い間、父おしやべりをしていた、手には黒いレースの手袋があつて。それを見ていたら、絵のように綺麗だなんて思いました。父の最後の日誌は住谷さんが帰っていらつしやる時に



お父様の手帖メモ。戦友の住谷氏が靴底や服の中に隠して命がけて持ち帰ったもの

外套の襟に隠して命がけで持って帰ってくださったもので、父は母の写真と一緒に肌身はなさず持っていたそうです。女の子が生まれて奉子という名前を付けたことは母の手紙で知っていたようで、日誌には母の名前と私の名前がびっしり書いてありました。父はどんなに生きて帰りたくて無念に亡くなったかをそこに立ってみて初め

て痛感しましたし、戦争ってやはりむごいものだと思えて感じました。気付くと、約束の3時間はとくに過ぎていたんです。ロシアのお偉方が付き添ってたんですけど、私たちがお墓を作ってお参りをしていることがわかったらしく、みんな気が付かないふりをして後ろを向いていてくれて、ありがたいなって思いましたね」。

4歳でデビュー、 天才子役から名女優へ

松島さんの運命を大きく変えたのは、バレエとの出会い。最悪な食糧事情で引き揚げてきて身体が弱かった松島さんの足を丈夫にするため、母がモダンダンスの第一人者といわれる石井猿先生のもとに連れて





いき、3歳の時に「小さな豆バレリーナ」として全国の映画館で流れるニュース映画で紹介された。これが大反響となり、芸能界入りのきつかけとなる。デビュー作は阪東妻三郎主演の映画「獅子の罠」。

「物心ついた頃から、音楽を聞くと踊り出すほど踊りが好きだったみたいなんです。3歳の子がバレエを踊ってるということで、当時は珍しかったんじゃないでしょうか。それがニュース映画に撮られて上映されて、俳優の阪東妻三郎さんと、当時娯楽の大監督でいらした松田定次監督がご覧になって、この子を映画に使いたいというお話をいただいたんです。まだ父の消息もわからない状態でしたし、祖母と母はともでもないって必死でお断りしたらいいんですけど、石井獏先生ご夫妻が『お父様の安

否もわからなくて不安定な状況だけど、映画に出るのは明るいことだから1本だけ出てみなさい』って言われて」。

以来、主演した映画は80本以上。天才子役といわれた少女時代から現在まで、「女優・松島トモ子」はひとつの時代を築いた。

アメリカ留学、 そして命拾いした事故

芸能界での活躍を続ける中で、彼女の大きなターニングポイントは2度あった。ひとつは18歳の時。松島さんは売れっ子女優の生活を離れ、2年半に及ぶアメリカ留学へと旅立った。

「お仕事はもちろん嫌いじゃなかったんですけど、学校と仕事しか知らなかったんです。小学生の時から家庭教師が家に住

み込んでましたし、そうしないと勉強が追い付かないので、忙しくて自分の時間はまったくありませんでした。でも自分で選んだわけではなくこの世界に入ってしまったという負い目のようなものを感じていたので、一度仕事をやめてみななければいけないと思っていました。たまたまアメリカ留学というチャンスがあったので行って、生まれて初めて普通の女の子の生活をしたんです。それまでは松島トモ子ということのみなさんが大事にしてくださるわけで、雨が降ったら間髪を入れず傘が出てくるしお金を持ったこともない生活だったんですが、そのおまけがなくなったら自分一人で生計を立てることがどんなに大変なことかわかりました。なにもかも初めてで英語も大変でしたけど、今でもあんなに楽しかったことはないなってぐらいい素晴らしい青春時代だったと思います。私は開校以来初めての有色人種で、日本人初めての卒業生なものですから、今でも同窓会をしたり、呼ばれて卒業式に行ったりしています。今の卒業式を見ると、当時は有色人種が入学できるかどうか大騒ぎになったのが信じがたいですね」

帰国した松島さんをマスコミが放っておくはずがなく、彼女は英語力とモダンダンスの神様といわれるマーサ・グラハム氏のもとで学んだダンスの技術を使い、さらに活躍の幅を広めた。もうひとつのターニング



ポイントとは、ライオンとヒョウに襲われた二度にわたる事故だ。

「事故は20数年前になりますね。『野生のエルザ』のジョージ・ダムソンが当時81歳で、彼の生涯を撮るというドキュメンタリー番組でアフリカに行ったんです。もともと映画を見たり本を読んですごく憧れてましたし、英語ができて動物が好きだということでお話がきたんですね。事故はライオンとヒョウで2回あったんですけど、ヒョウの事故はあと1ミリ場所が違ったら死ぬか全身麻痺になっていた大変な怪我で、第4頸椎粉碎骨折して生きていること自体が大変稀有なことなんだそうです。いま考えてもなぜ私が出たのか奇跡だと思わず、助かったことは何かをしなきゃいけないんじゃないかって思うようになったんです」。

今後続けたいこと、したいこと

何かをしたいという思いが形になったのは、9年前に出会って現在も続けている「車椅子ダンス」。

「最初は車椅子ダンスの世界選手権大会をやろうとした方に『何かお役に立ちたい』と申し出て、司会を引き受けました。出場するつもりはまったくなかったんですけど、当時のテレビは障害者を取り上げがらなくて、踊りは美しくて華やかなも

のだからバラエティにするためには私が踊れということになったのがきっかけなんです。一緒に踊る時に、相手の方にどうされたのかときくんですが、私が怪我した第4頸椎を骨折したり粉碎した人は寝たきりで、車椅子に座することも不可能くらいにひどいんです。私が命をいただいたことは、障害者の方を楽しませてあげることとひとつの役目かなと思うんですね。これからも車椅子ダンスはずっと続けていこうと思います」。

7年前、高級ホテルのワンフロアを借り切って、松島さんのデビュー50周年を祝う

盛大な会が開催された。レコードや雑誌の表紙、主演映画の映像など、50年に渡る実績を目の当たりにし、初めて自分の仕事を認めることができたという。

「50年もこの仕事をやってきたのはすごく恥ずかしいって思ってたんですけど(笑)、ある時代の方たちを楽ませることができたんだ、大事にしなきゃいけないって思いました。2年後は60周年になりますけど、それでも64ですからまだ若いんですよ。母が今86なんですけど、私より元気でしっかりしているので、また親子旅行にも行きたいですね」。

